

東京新聞
夕刊
中日新聞東京本社
東京都千代田区内幸町二丁目1番4号
〒100-8505 電話 03(6910)2211

美術評 小野博個展『正しさの場所』

「濃い」展覧会である。展示構成はシンプルだ。写真2、5点とテキスト1枚がセットになっている。まず写真を見てみよう。①には生い茂った枝の向こうにうつすらと原子力発電所の煙突が写っている。②はやはり煙突と錆の浮いた屋根が印象的な工場のような建築物。③は人けのない海岸と海の向こうに見える建造物のシルエット。テキストはクリアケースに入り手にとって読めるようになっていて、これらの写真がそれぞれアメリカ、旧ソ連、福島で事故を起こした原子力発電所であることが明かされ、事故のあらましと、作家がその地を訪れた時の印象が書かれている。写真はその場にいなければ撮れない。写真家はその1枚の写真的前後を経験し、写真に写らない知識と思考の過程を心身に刻み込んできた。しかし現代では誰もがスマホで写真を撮りネットに上げる。わざわざ

複数の場所、共通するものをつなぐ



《スリーマイル島原子力発電所》《チェルノブイリ原子力発電所》《福島第一原子力発電所》《正しさの場所》シリーズから 2020-2024年 ©Hiroshi Ono, courtesy KANA KAWANISHI GALLERY

現場へ行くことに意味があるのかと疑問を持つ人たちもいる。ネットに漂うイメージを引用し、メディア批評の文脈でつくられた作品も珍しくない。この展覧会を見てまず浮かんだ疑問も、作家が撮った写真かどうかだった。

結論から言えばすべて小野博がその場まで行って撮っている。米ソ日の原発のみならず、ギリシャとトルコの間にある緩衝地帯とスペイン・モロッコの国境、コロナ禍で反ワクチンを叫ぶデモと白衣を着た医師など、世界各地で「正しさ」をめぐる議論と対立が起きている場所が時空を超えて並んでいる。小野はそれぞれの場所で数多くの写真を撮ったことだろう。それぞれの場所ごとにルポを発表できるほどに。しかし小野はあえて一つの場所から一点を選んだ。複数の場所に共通するものを見つけて出し、写真という回路をつなぐ。そうすることで世界の見方に新たな視点を付け加えたのである。

*東京都港区西麻布2の7の5
ハウス西麻布5F、KANA KAWANISHI PHOTOGRAPHY = 電03・5843・9128 = で、9月14日まで。日・月・火曜休廊、17日まで夏季休廊。

ある。作家がその場に立ったということ想像することで、情報はかたちになって立ち上がる。このシリーズがアートギャラリーで展示されるのは、白い空間の中で写真と高き合い、テキストを手がかりに考える時間を持つてほしいからだろう。報道とは別のアプローチで描かれた社会、歴史のイメージは、私たち鑑賞者の目を洗ってくれる。
(タカザワケンジ=写真評論家)

文化